

おかえり わたしのいとし子

わたしの息吹きよ おかえり  
わたしであるものよ おかえり  
またひとり 舞い戻ってきた  
咲きこぼれる桜を手繰って手繰られて  
はらからの待つふるさとへ  
おかえり いとし子よ

一九三一年二月十六日

富士の胎内に昂る火は営々と水を濾過し  
黄道みずがめ宮に太陽はあつた  
いにしえからの約束をわたしが  
おまえの眼差しにそつと置いたのは  
摂理が鮎の背びれに光るその朝

初夏の田んぼのめざましい蛙の筋力は  
知識と智慧との甚だしい距離のしるし  
没落士族の庭の訓おしえをもぞもぞ聴く膝小僧  
あの小枝はミミズを掘るのにうってつけ  
父親の書棚に揺れるさざ波を潜ればいつも  
意味と意思をつらぬいて広がっていた豊饒

わたしは あめつちに注ぐいのち  
わたしをそこなっていた事どもが  
だしぬけに斃れたあの夏 八月十五日

生き存うよろこびと夭折できぬ戸惑いが  
青すぎる空の下 おまえに満ちて噴きだした  
濾過された水として

まこととは 真の言の葉  
まこととは いつわらぬこと  
まこととは 詩を生きること

浅ましく記すことなく  
貧しく語ることなく

世界と視界 二重写しの漆黒に針孔を穿ち  
因果にゆだねられた種子と

自然<sup>じねん</sup> かななる営みを確かめつづけた  
それから時々わたしを口寄せた

万葉びとも平安びとも そのうたが  
だれかに留まるかぎり今なお生きる  
依り代の言の葉にそよいで  
解いた現し身を越えて生きる  
だからいつか おまえもうたうだろう  
はるかなことばになって

小鳥のさえずりと雷雲の兆しを巡れ  
刻まれる一瞬と 一瞬に裏付けられる久遠に遊べ  
不在によってこそ人のくちびるによみがえるものとなって  
うたえ おまえのために わたしのために  
さあ 水瓶に水をたたえよ  
ふたたび あめつちに注がれるものとなるために